4．起業教育に関する実践報告

アクティブ・ラーニングの活用方法
①「学び合う授業の先にあるもの」

京都府立　京都すばる高等学校　小川　建治
京都府立　木津高等学校　　貴島　良介

1．アクティブ・ラーニングの定義

⑴　平成24年中教審答申用語集のおける定義

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査 学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク 等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」と定義されました。

⑵　平成29年３月公示　小学校学習指導要領の定義

「主体的・対話的で深い学び」と定義されました。

⑶　今回の発表における定義

グループワークやディベートは、あくまでも AL の手法のひとつ。１人ひとりの脳内がアクティブになれば、それが AL です。

2．京都すばる高校　企画科　「広告と販売促進」における実践

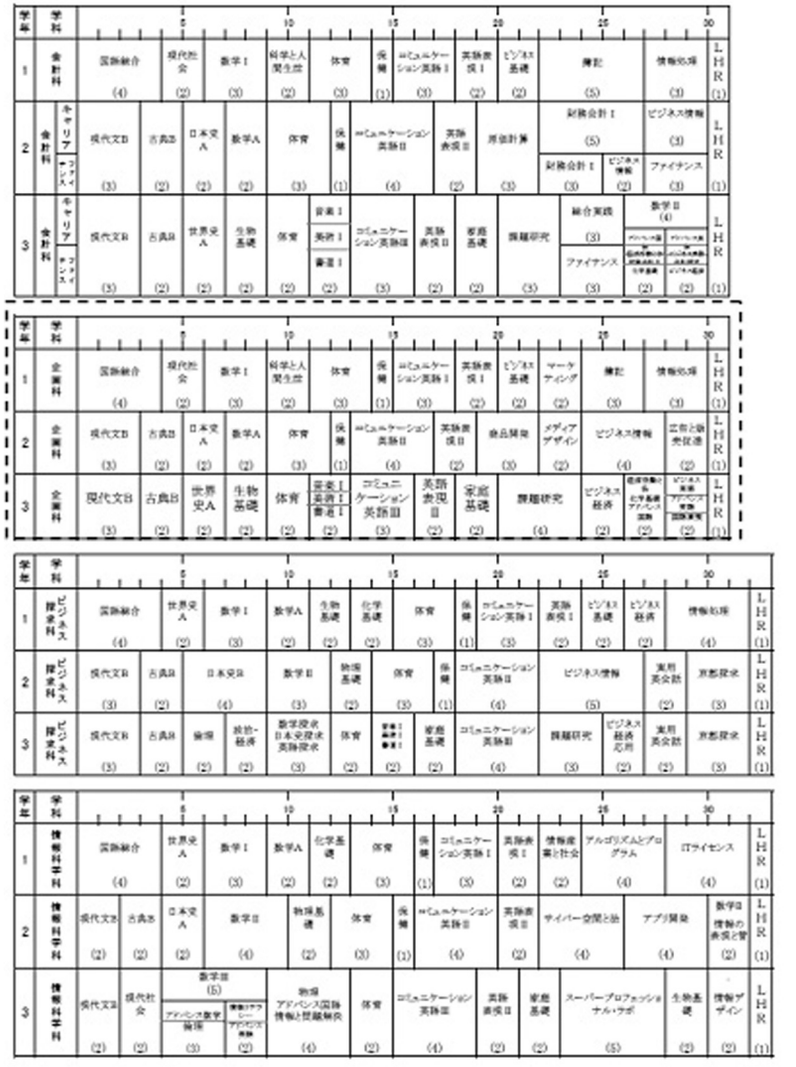
⑴　京都すばる高校　企画科のコンセプト

京都府立京都すばる高等学校は商業科３学科・６クラス、情報科１学科・２クラスの計４学科８クラスの専門高校です。その中の企画科では、グローバル化がますます進展する経済社会の中で、マーケティング分野における企画力と実践力を身に付けた人材育成を目指しており、企画力を身につけるためのコンセプトを以下のように表現し、生徒たちに説明しています。

「誰かのために、新しい価値を創造する」

このコンセプトには、企画の対象は自分でなく、他人である。そのためには、他人事を自分事としてとらえる普段からの心構えが必要であることと、価値は提供させる側にその必要性があった時に生まれるもので、提供される側の不足や不十分、不満や不安といった状況を調査によって調べると同時に、気持ちを思いやることが大切である。といった意味が込められています。

⑵　京都すばる高等学校の教育課程

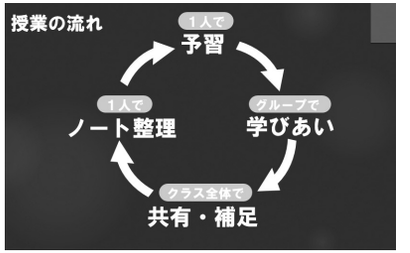


京都すばる高校企画科では学習指導要領に示されている商業科の学習分野であるマーケティング分野、ビジネス経済分野、会計分野、ビジネス情報分野の中の、マーケティング分野を中心として、他の分野もバランス良く学習する教育課程を編成している。その特徴を示すと以下になります。

○１年次でマーケティングを履修する。
○２年次の商品開発、広告と販売促進、メディアデザインで科目連携を図りながら専門的な知識と技術を修得する
○２年次のビジネス情報で全国商業高等学校協会主催情報処理検定試験で１級取得を目指す。
○３年次の課題研究は６つの研究テーマを選択し、３年間の集大成とする。

⑶　広告と販売促進の授業の流れ

前述の教育課程の中の２年次(※)に履修する「広告と販売促進」において実践したアクティブラーニングについて報告します。まず、京都すばる高等学校企画科の広告と販売促進の授業の流れを説明します。



※平成28年度は教育課程の一部変更の過渡期であり３年次に履修しています。

第一段階　「予習」

次回授業にむけて、あらかじめ課された「課題」について、指名された担当者が「予習」を行います。課題は、教科書に書かれた内容をもとに解説できる内容であり、グループ内の３名に違う課題が割り当てられ、各自が５～７分程度説明する資料を準備します。

（課題例）

①広報の種類と役割について、実例を挙げて説明せよ
②広報の仕事と組織について説明せよ
③商品広報を３種類に分け、それぞれの実例を挙げよ
④プレスリリース、スポンサーシップについて説明せよ

第二段階　「学びあい」

授業開始後すぐに、机を移動し、グループ毎の島をつくり、課題別に担当者が解説します。その時に資料を配付すると同時に、ホワイトボードを活用して、書き込みながら解説する生徒やフリップを作成して解説する生徒、あるいは何らかの実物を持ち込む生徒がおり、理解が深まるよう創意工夫を行います。

第三段階　「共有・補足」

担当教員が補足すると同時に、優れた説明やユニークな説明について全体に紹介し、情報の共有を行います。なお、教室にはプロジェクターとスクリーンが設置されており、生徒が準備した資料はiPadを活用してスクリーンに投影します。

第四段階　「ノート整理」

最後に各自がノートを整理します。第二、第三段階では、教室内はかなり活発な様子になりますが、この第四段階では静かにノート整理を行います。

以上の四段階を、毎時間繰り返し、その中で担当教員が発言する時間は少なく、生徒の説明を補足する程度です。

⑷　生徒振り返りレポート



■自分が調べて解説したところで「わかった！」って言ってもらえてうれしかった。
■毎回、次はどう説明しようか、どんな例を出そうか、どんな小道具を作ろうかと考えるのは、とても大変だけど面白かった。
■自分が担当のところは責任を持たないといけないと分かった。
■ノート整理の時もテストの時も、「あー、これ○○ちゃんが説明してくれたやつや！」ってなって、すぐ思い出した。
■買い物に行ったときとかに、「この例は広販の授業で使おう」と思うようになった。

⑸　相互評価について

アクティブラーニングの評価として以下の手順で相互評価を行います。

①自分以外のメンバーを名簿（番号）の早い順に記入する。
②以下の３項目について、それぞれ10点を自分以外の３人（３人班の場合は９点を自分以外の２人）に分配する。
項目１）意欲的に情報収集や準備をしていた（10点満点）
項目２）積極的に発表し、わかりやすく伝えていた（10点満点）
項目３）積極的に聴き、理解するよう努めていた（10点満点）

【例】

	番号	名前	評価項目①	評価項目②	評価項目③	合計
A	5	伏見 京子	1	3	3	7
B	15	向島 二郎	5	4	6	15
C	20	（自分）				
D	38	小倉 すばる	4	3	1	8
		合計	10点	10点	10点	30点

３．木津高校　情報企画科　「財務会計Ⅰ」における実践

⑴　木津高校　情報企画科のコンセプト

京都府立木津高等学校は商業科１学科、１クラス、農業科１学科、１クラス、普通科５クラスの計３学科７クラス規模の普通科、専門学科の併設校高校です。その中の情報企画科では、ビジネスの基礎･基本を身に付けるとともに、情報企画科の取組や学習を通して、「人間力」 を高め、「 将来、社会で活躍する人間の育成！」 を目指しています。

⑵　教育課程


京都府立木津高等学校　平成27年度入学生　情報企画科　教育課程

木津高等学校情報企画科では、「将来、社会で活躍する人間の育成」を目標に次の３つ具体的な目標を掲げています。

①「情報活用能力の育成」

情報企画科では、コンピュータを自由自在に実践的に使いこなすことはもちろん、世の中にあふれるさまざまな情報を収集し、正しい判断で加工・伝達するなど、コンピュータを使って情報を有効に活用できる能力を身に付けます。

②「企画力・コミュニケーション能力の育成」

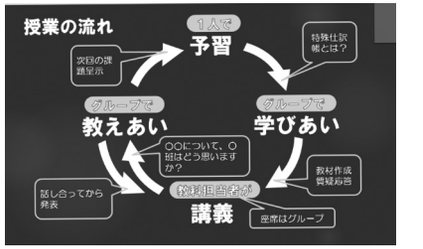
情報企画科では、地元の木津川市を中心とする相楽地域の市町村・企業・大学・本校のシステム園芸科などと連携・協力して、生徒が様々な企画を提案し、実現を目指しています。自分達で考え、企画としてまとめる力(企画力)、その実現を目指して提案するために人に伝える力であるコミュニケーション能力等を向上させます。

③「資格取得」

資格取得への取り組みを通じて、ビジネスに関する基礎･基本を身に付けるとともに、自ら目標を設定して、それを達成するために努力をするという経験を重ねることにより成長していきます。

⑶　財務会計Ⅰの授業の流れ

前述の教育課程の中の２年次に履修する「財務会計Ⅰ」において実践したアクティブラーニングについて報告します。「財務会計Ⅰ」の授業の一部にアクティブラーニングを導入しています。その流れを説明します。



第一段階　「予習」

次回授業にむけて、あらかじめ課された「課題」について、指名された担当者が「予習」を行います。課題は、本時の学習内容の導入部分であり、グループ内（４名）の１名が担当し、３分で説明する資料を準備します。

（課題例）

①株式の取引価格が変動する理由を説明しなさい。

②特殊仕訳帳とは

③費用・収益の見越しとは

第二段階　「学びあい」

授業開始後すぐに、机を移動し、グループ毎の島をつくり、課題別に担当者が解説します。３分間の説明の後に２分間の質疑応答とノート整理の時間を設け、本時の授業の導入とします。

第三段階　「講義」

ここでは、机を講義状態へ戻し、通常の講義形式の授業を行います。

第四段階　「教え合い」

ここでは、もう一度机を移動させ、グループ内で演習を行い、教え合いの時間を設けます。授業の始めの導入部分でうまく学び合いが出来ていれば､この時間で教え合いのシーンが生まれます。この学び合いと教え合いが成立する上で重要な要件が班の構成員です。科目の性質上、学習の理解度に差がありますが、それを活用し教える側にも教えられる側にも効果が上がるよう、学習の理解度の異なる生徒をバランス良く配置するようにしています。また、学習の理解度とともにADHDやLD等、学習支援が必要な生徒への対応にもアクティブラーニングは効果を発していると思います。

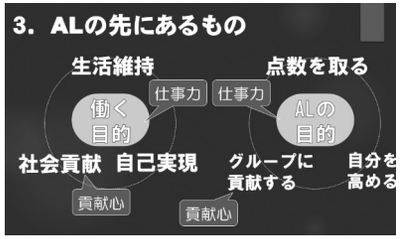
	中間考査	評価	班
男	96	◎	1
男	63	○	1
男	28	×	1
女	97	◎	2
男	66	○	2
男	59	△	2
女	8	×	2
男	82	◎	3
男	63	○	3
女	55	△	3
女	9	×	3
男	95	◎	4
女	63	○	4
男	49	△	4
女	15	×	4
男	88	◎	5

4．アクティブ・ラーニングの先にあるもの（起業教育とからめて）

⑴　主体的・対話的で深い学び

平成29年３月公示の小学校学習指導要領ではアクティブラーニングを「主体的・対話的で深い学び」と定義されています。そこで大切になってくるのが、アクティブラーニングの主体者である生徒達が「自ら」の意思で、「互いに教え合う（貢献し合う）」状態になっている事だと思います。

⑵　働く目的とアクティブラーニングの目的

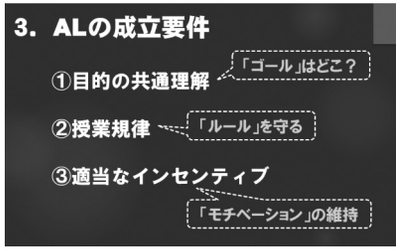


アクティブラーニングの目的に、商業教育としての目的を付け加えるなら、それは、「仕事力」の育成だと思っています。我々は働くことの目的を「生活維持」「自己実現」「社会貢献」だと考えており、それはアクティブラーニングによって「点数をとる」「自分を高める」「グループに貢献する」といった目的と合致するのではないか、働くこととアクティブラーニングの目的が合致し、その目的が達成された時に身につく力が、いろいろな職業の中で必要とされる「仕事力」だと考えています。

⑶　アクティブラーニングの成立要件

最後に、アクティブラーニングが成立する３つの要件をまとめました。

①目的の共通理解



「何故」授業を「対話的にする」必要があるのか、「対話」をすることだけで「深い」学びになるわけではなく、「深い」学びになるために「対話」を行う必要性があることを教員と生徒の間で共通理解をしておく必要があります。

②授業規律の確保

授業において机を移動し、話し合いが出来る状態にすることは、授業規律を乱す危険性があります。話し合いの延長線上に余計なおしゃべりが存在するかもしれません。また、普段の生徒間の人間関係なども話し合いに影響する可能性があり、それが予期せぬトラブルに発展するケースもあります。そこで、大切なのは、担当教員が普段の授業にも増して、授業規律を保ちながら全体を授業の目的達成というゴールへ導く情熱と技術が必要です。

③　適当なインセンティブ

生徒の主体性を維持させるためには、教員による適切なインセンティブが必要です。それは成績の向上といった見返りだけではなく、全体に貢献したい、誰かの役に立ちたいといった欲求を持たせることと、それを達成させるという見返りが大切です。アクティブラーニングを行っているときの教員の役割は、スポーツの試合において、審判とコーチを同時に行うようなものであり、非常に高度な能力が求められます。「主体的・対話的で深い学び」を実現させるために我々教員は今後ますます研鑽を積む必要があります。